

池田市制80周年記念 特別展

没後50年

富貴のひと

鍋井克之

その2

前回、池田ゆかりの洋画家・鍋井克之の人生を概観しました。今回は、鍋井の画業をとおして、彼の「世界」を見ていきます。

## 大阪の洋画壇

「画を描きたければ東京へ行け」。鍋井が学生のころ、そんな言葉が当たり前なほど、大阪に洋画を生業とするコミュニティー画壇はありませんでした。1年余りのフランス洋行後、東京行きを関東大震災で諦めた鍋井は、生まれ育った大阪で、自らの道を開くことになりました。

大正13(1924)年、大阪市西区に創設された信濃橋洋画研究所は、彼にとつてその大きな一歩でした。鍋井をはじめ、小出権重、黒田重太郎、国枝金三という、当時洋画界で新進気鋭の若手画家が起こしたこの研究所は、生活の近代化とともにようやく広がりをみせた洋画を学ぶ拠点として、大阪に革新的な美術の風を送り込みました。当時東京でも珍しかった

エレベーター付きのモダンビルにあった研究所には、図案などデザインを学ぶ者も多く出入りし、近代化する都市文化のニーズに応えていきます。

こうして、多くの画家を輩出した信濃橋洋画研究所は、大阪洋画壇の、生みの親ともなったのです(名前を変え、昭和19年まで存続)。

## 「油絵日本画」

大阪で、画家としての活動基盤を固めた鍋井。では、彼がめざした絵の世界とは、どのようなものだったのでしょうか。洋画の故郷、フランスにも渡りながら、



▶ 鍋井克之「刈田の雨」(大阪市立美術館蔵)

鍋井はその画風に一切影響を受けることがありませんでした。むしろ、彼はこの異文化体験を機に、日本の風土に根差すものを題材にした新しい風景画を志します。日本画の領域へ踏み込む鍋井は、それを「油絵日本画」と呼びました。

古い建築物、複雑な山の稜線、緑の色、花や鳥。鍋井は西洋の地で培われた油絵にこれら日本画のモチーフを取り込む困難をあえて選びました。ただし、絵具を変えただけのような「日本画趣味」に陥ることなく、洋画の伝統的な技法をしつかりと踏まえて描く。鍋井はこれを「筋を通す」と表現します。題材に沿うのではなく、描き手の心Ⅱ「自分らしさ」を絵に表せばよい。

彼は、この「らしさ」をもって、自らの絵を純化させていきました。

## 風景に想いをのせて

鍋井は、洋画家があえて選ばない、短く「うつろう」画材を好みました。

「雲とか水とか風とか、それから雨とか：短時間に描いてしまわないといけないうものが好きですね。風景に託すというか、なにかそういう感情を表わすものが好きなんです。」(「作家の発言」『みずる』S41・4)。

池田の自宅に近い田んぼを題材とした「刈田の雨」には、田をたたく村雨や、空



信濃橋洋画研究所の開所式(後列左から2番目が鍋井)

を映す水たまりなど、その瞬間の情景が写し取られています。鍋井は、絵は「あたまでなく心で描く」ものだと言っています。細かな輪郭にとらわれず、山を描けばその大きさを、海の断崖を描けば、高さを、その重量感までも、キャンバスに封じ込めようとしたました。

湿りを帯びた風景、変わる天候、そこに入り込む、詩的ともいえる感情。これら、いかにも日本的なものに、彼は正面から向き合いました。自然を美化せず、絵の世界で「美しくない」日常の風景も、恐れずありのままに描く。その中に、かえって西洋の油絵の核心を見出し、昇華しようとしたのです。

次回は、鍋井の著作などをとおして、彼と文芸との関わりを見ていきます。

◆問い合わせは歴史民俗資料館

☎75113019